

しむ。呪する時には愈え、すなはち退むれば病発る。是くの如く怪生りて、多の日に輟まず。強ひて盟ひてなほ呪す。病者託ひて曰はく「我れは是れ狐なり。無用なり。伏はず。禪師強ふることなかれ」といふ。問ひていはく「何故ぞ」といふ。答へていはく「斯れ先に我れを殺しき。我れ彼の怨を報ゆるなり。是の人纔死なば犬に生れ我れを殺さむ」といふ。聞き怪びて教化ふれども、放さずして殺す。一年の後に、其の死にたる人の臥せりし室に、禪師の弟子病に臥す。爾の時に有る人、犬を繋ぎて禪師に来る。彼の犬吠え、抓きて枷の鎖を脱たむとし、鎖を断りて奔らむとす。禪師怪びて犬の主に告げて言はく「放ちて由を知らむ」といふ。纔放てば、病める弟子の室に走入り、狐を咋ひて引き出す。禪師犬を禁むれども鱗ひ殺すことを免れず。断に委る、斃にたる人還りて彼の怨を報ゆることを。嗚呼、惟れば、怨の報朽ちず。何を以ちての故に。毗瑠璃王、過去の怨を報いて釈衆九千九百九十万人を殺す。怨を以ちて怨を報ゆ。怨なほし滅びず、車の輪の転るが如し。もし有る人能く忍辱を学ぶる時に、怨むる人を見れば、我が恩の師とせよ。彼の怨を報いず、之れを以ちて忍とせよ。是の故に、怨はすなはち忍の師なり。所以に書伝に云はく「もし罵を忍びずは、心危くして其の母をすら打殺さむ」といふは、其れ斯れ

を謂ふなり。

### 沙門十一面觀世音の像に憑願ひて現報を得る縁 第三

#### 三

沙門弁宗は、大安寺の僧なり。天年弁有。白堂を宗とし、多く檀越を知り、高く衆の氣を得たり。帝姫阿倍天皇の代に、弁宗其の寺の大修多羅供の錢三十貫を受用て、償ひ納むること得ず。維那の僧等錢を徴りて逼むれども、償を償ふに便無し。故に泊瀬の上山寺に登り、十一面觀音菩薩に参向て、觀音菩薩の手に繩を繫けて引きて白して言さく「我れ大安寺の修多羅宗分の錢を用て、償ふに便無し。願はくは我れに錢を施へ」とまうし、名を称へて願ひ求む。是に維那等、来り徴りてなほ逼む。答へて言はく「暫待て。我れ菩薩に錢を白して償はむ。敢へて久しく延べず」といふ。時に船親王善き縁有りて其の山寺に参至り、法事を備けて行ひたまふ。弁宗法師像に繫けたる繩を引き、なほ白して曰さく「錢を速に我れに賜へ。徴る錢速に償はむ」とまうす。親王聞きたまひて、弟子に問ひて言はく「何の因縁を以ちて今斯の禪師是くの

「原文」即退。呪することをやめると同時に、の意。二いわる狐憑きである。三「纔」は、一すると同時に、の意。四「縛」は、一すると同時に、の意。五この狐は永興の寺の室に住みついているような印象を讀者に与えている。六もどつて来て。

七釈種(釈迦族。釈迦牟尼仏もこの一族の出身)の女を妻としようとした波斯匿王(はせきぎ)は、釈種に謀られて婢を妻としたが、その婢より生まれた毗瑠璃王(はるり)は、釈種に罵詈雑言され、王となつてのちに釈種を攻め滅ぼした。増一阿含經・二十六はじめ諸書にみえる。増一阿含經・二

ハ過去世の怨。前生での怨が今生ではらされた、とされる。増一阿含經・二十六によれば、羅闍城の人々は拘瓊魚を食べたが、その拘瓊魚が今生の毗瑠璃王、羅闍城の人々が今生の釈種。

ハ「以怨報怨、怨終不滅」菩薩戒本疏・下本、梵網經占述記・下末などに長寿王經の文としてみえる。二上卷六縁。

三未詳。本説話に引用された書伝の文には其母の語がみえるが、上卷二十三縁にも書伝に關して「徒学書伝、不養其母」とあった。孝にかかわる記述を含んだ同一の書物であろう。三他人に罵詈雑言することに耐えられないならば、心に不安を生じ殺生の業をつくるであろう。自分の母さえもついに打殺すであろう。母からの叱責にさえも耐えられないであろう。

第三縁 善業についての現報説話。下巻では本説話のみ。今昔物語集・十六ノ二十七に書承。

四未詳。本説話以外に所伝をみない。長谷寺

藏本・長谷寺驗記・下所収の類話に主人公を「弁宗法師」とする。これによつて「べんそ」とよんでおく。五弁舌にたけている。六未詳。弘仁九年(八二五)五月二十九日の官符(類聚三格・三)に「拳衆白堂威令・機海」とみえる改証。「堂前に白す、つまり、祈禱する人々の願を仏の堂に申して取次ぐ、の意か」とする遠藤嘉基、春日和男の説に諸注はしたが、が、「白」が「も」の意か否か、「堂」が「堂舎」の意か否か、不明である。言語が明瞭である、声がとおる、といった「亮堂」の語に類似した意ではないだろうか。

七中卷二十四縁、二十八縁。

ハ三綱のひとつ。寺内の僧を規制する職。

元長谷寺。

三本造。高さ二丈六尺。神龜四年(七二七)完成(三寶絵・僧二十所引觀音の縁起并に雜記)。天平五年(七三三)開眼(長谷寺縁起文)。のちに焼失し、現在の十一面觀音像は後代のもの。本説話で、大安寺の仏菩薩(たとえは丈六仏。上卷三十二縁、中卷二十八縁に祈願せずになだに泊瀬におもひつゝ縁に注目される。大安寺伽藍縁起并流記資財帳(七四七七年成)には十一面觀音像を載せない。この種の祈願はもっぱら十一面觀音像にしておこなわれ、しかも大安寺に當時十一面觀音像が無かつたのであろうか。

三施無畏手である数珠を持つ右手に、繩を繫けたのであろう。「及作三施無畏手者、修行求願、必得所願、故表三施無畏手者、謂三施無畏手、能施一切、破貧窮困、故為施無畏手、也(十一面神呪心經義疏)。「一切財物衣服飲食、自然充足、恒無乏少」(十一面觀世音神呪經。中村史の指摘がある)。

如く白す」とのたまふ。弟子答へて、上の如く具に述ぶ。親王状を聞き、錢を出して寺に償ひたまふ。方に知るべし、觀音の大なる悲と法師の深信とを。

#### 沙門方広大乘を誦持ちて海に沈み溺れざる緣 第四

諸樂京に一大僧有り。名詳ならず。僧常の方広經典を誦み、俗に即きて錢を貸して妻子を蓄養ふ。一の女子嫁ぎて、別れて夫の家に住む。帝姫阿陪天皇の代の時に、賀は奥國の掾に任けられ、すなはち舅の僧に錢二十貫を貸りて装して任けらるる國に向く。歳余を歴て貸れる錢一倍となり、僅に本の錢を償ひていまだ利の錢を償はず。いよいよ年月を逕て、なほ微り乞ふ。賀竊に嫌を懷きて、是の念を作さく「便を求めて舅を殺さむ」とおもふ。舅知らず、なほ平の心もちて乞ふ。賀舅に語りて曰はく「共に將て奥にして償はむ」といふ。舅聞きて往き、船に乗りて奥に度る。賀と船人と心を同じくし、惡を謀りて、僧の四の枝を縛りて海の中に擲陷る。詐りて妻に語りて曰はく「汝が父の僧汝が面を隣むと欲ひて共に率て度り来り、忽に荒き浪に値ひ、駢船は海に沈み、大徳は溺れ流れ、救ひ取るに便無し。終に溺ひ沈みて亡ぬ。ただし我れ

のみ僅に活けり」といふ。其の女聞きて、大に哀び哭きて言はく「幸無くして父を亡ふことは、凶らずして宝を失ふなり。我れ別に知る、父の儀を能見ることは底なる玉を寧視るなり、と。また父の骨を得む。哀なるかな。痛きかな」といふ。僧海に沈みて、心を至して方広經を誦誦む。海の水凹み開け、底に踞りて溺れず、二日二夜を逕て、後に他船人奥國に向きて度りて見れば、繩の端泛びて有りて海に測ふ。船を留めて繩を取り、牽けば僧上る。形色常の如し。是に船人大に怪びて、問ひていはく「汝は誰れぞ」といふ。答へて云はく「我れは某なり。我れ賊盜に遭ひて繫へ縛られ海に陥れらる」といふ。また問ひていはく「師は何の要術有るが故にか水に沈みて死なざる」といふ。答へていはく「我れは常に方広大乘を誦持つ。其の威く神き力、何ぞ更に疑はむ」といふ。ただし賀の姓名は、他に顯さず。冀はくは我れを奥に泊てよとねがふ。船人冀に随ひて、奥に送る。彼の賀奥國にして、陥れたる舅の為に聊齋食を備けて三宝に供る。舅の僧展転りて食を乞ひ、偶法事に値ひて自度の例に有り。面を匿して居て、其の供養を受く。賀の掾自づから布施を捧ぎて、衆の僧に献る。是に海の中に捨てられたる僧、手を申べて施を受く。行す掾見て、目測青になりて面赫然し、驚き恐りて隠る。法師咲を含み、顧らずして

三 大安寺の僧がこゝまで追つて来て徴るのは、異縁である。  
三「まうす」は、神仏に願つて授かる意。後代の「申しす」という語における「まうす」と同じ。  
四 舍人親王の子で淳仁天皇の兄。天平宝字三年（宝元六年）に三品を授かり親王となる（統紀）。天平宝字八年（天徳）十月に諸王とされて隱岐國に流罪（統紀）。致証は「船親王」といふ呼称をもとにして、弁宗は孝謙天皇の時代に錢を借りて淳仁天皇の時代に返済をせまられた、とする。  
五 原文「繫像引繩」。  
六 弁宗の弟子。上文にみえる「檀越」。

第四條 三宝給・法十五、扶桑略記・元明天皇条に引用。三宝給より今昔物語集・十四ノ三八に書承。  
一 大通方広懺悔滅罪莊嚴成仏經をさす。三卷。同經卷上に「大東方広經典」とある。  
二 俗人としての生活すること。経済活動についていうか。「剃除鬚髮、著袈裟、即俗收家、營造產業」（下巻十條）、「著俗當農、著養妻子」（下巻三十條）、「居于俗家、而著妻子」（下巻三十八條）など、類似例がある。  
三 今沙門耽好酒樂、或畜妻子、取賤売貴、專行詐給（弘明集・所引理惑論とあるように、中国でも僧の妻帯はめずらしいことではなかった）。  
四 隱岐國。諸法、陸奥國とするが、本説話では、海路をごく一般的な交通路として利用して到達した、と叙述されており、また「駢船」の語もみえ、陸奥國とは考えにくい。当時、東國からは陸奥國へ海路がひらかれていた。さらに紀伊國から陸奥國への移動も海路を利用したと想定する説平川南、中村太一なども存するが、本説

話にみえるほどの一般的な交通路であったとは考えられない。三宝給は陸奥國とするが、渡海を他國への途次とする。ただし、隱岐國と解したばあい、本説話に據が登場するのは不審。隱岐國は下國で據は置かれてはいなかった。隱岐國に據が置かれたのは大同四年（八六）（類聚三代格・上）。  
五 倍。現代語でいう二倍。利息が元金と同額になった。雑令に、公私の財物を出挙（し）たばあいの利息の規定がみえる（金吾義解）。六十日ごとに利を取る。その利の上限は六十日につき八分の一。ただし四百八十日をすぎても利は二倍を超えてはならない。複利は禁止。  
六 四肢。七官設の便船。  
七 父に再会することは海底の真珠を手に入れることだ。逢うことのできない人を海底の真珠にたとえる例に、万葉集・七・三七、三八、三九、三〇〇、などがある。  
八 叙述は海に投げ入れられた僧へと転ずる。  
九 「若為大水所漂、称其名号、即得浅処」（妙法蓮華經・觀世音菩薩普門品）、「持此經者、若入大水、水即乾涸」（觀世音三昧經）といった記述が方広經に存在したことを思わせる説話展開であるが、方広經にはこのような記述は含まれていない。  
一〇 私は何某である、と名のつた。三方法。  
一一 叙述は賀の掾へと転ずる。  
一二 道命の「わたつ海に親押し入れてこの主の盆する見るぞはれなりける」に関わる右衛門尉（じょう）であることが本説話と共通の説話（たとえば枕草子にみえる）を、本説話の伝承の末端に位置づける関根正直の説がある。  
一三 上巻十九條。ここでは乞食僧をいう。齋会に食を求めて集まる乞食僧。